

# シンフォニアデイズ

連蓮漣煉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分たちの生きる意味を理解し、だからこそ人というのは願いがあ

しかし、時として何かの理由でその願いが叶えられず、死を迎えてしまったとき、人はもうひとつの第二の人生「死人」として生きていくことが許される。

世界に見放され、自分の人生そのものに否定した傍若無人主人公と博覧強記死神ヒロインとの死後ファンタジーが始まる。

本格的にバトルが始まるのはBパートからです。

# 目次

## プロローグ

人生終了ジャストタイム	—	1
人生終了ジャストタイム②	—	8
人生終了ジャストタイム③	—	13
人生終了ジャストタイム④	—	20
Aパート		
願光クリアオブリージュ	—	23



# プロローグ

## 人生終了ジャストタイム

——…自分という存在が時としてわからなくなることがある。

なぜ自分がここにいるのか、なぜ自分が生きているのか。そんなことが時として頭によぎるのだ。

学校でおちこぼれの不良として謙視され、ついに高校を退学。強制的といえど、自分の居場所なのではないと思つた俺は学校からの強制退学をしたあの日もそう思つた。

そんなダメダメな人生を送り続けてなにが楽しいのかなんて、自分のほうが聞きたいくらい自分でもわかつてなどいないのだ。

……なんで、こんなよくもわからない人生が始まつてしまったのだろう。

きつかけ、といえば思い当たるのは、一年前に起きた「あの事件」がきつかけなのだろう——

その頃の俺の家庭は、どちらの意見にもついて行くことの出来なくなつた両親によつて離婚が決定していた。

元々一人っ子だつた俺は、両親はどちらかが俺を引き取ることでめあいになつた。

しかし、自分はどちらにもついて行かなかった。——一人で生きて行くことを選んだのだ。

その頃の俺は、親というその存在自体が嫌いだった。

毎日が地獄、人を恨み、そして……「死ねばいい」……そんな、殺人衝動にもかられていた。

自暴時期とか、そんなレベルはとづくに通り越していた……

今にも人を殺してしまいそうなほどに精神が安定していなく、暗闇のまっただかな生活していた。

「病んでいる」その言葉は俺にとつてかなり適切だ。

さほどもめることもなく、あつさり一人暮らしの生活を受理され、最低限の家とお金。最低限のぬくもりとして「ひいらぎりおん終裡音」という俺の名前だけを残り、離婚は確定された。

やつと一人暮らしになれて、少しは落ち着いていた。本当に、少しだけ……——

一人の暮らしの生活というのは、慣れが基本というがそれはまったくの間違いだと、俺は思う。一人暮らしというのは、ある意味、それまで溜め込んでいた負のオーラをどれだけその生活で吐き出すことが出来るかによって変わってくるのだと思う。

だから、吐き出すのに時間のかかる俺はまったくもってなにもできていなかったのだ。

——それが約一年前の俺だ……。なにも出来やしないのに、出来ている気になっていて、強気になっていた馬鹿な自分。そんな時、あの出来事が起こったのだ。

◆  
ほぼ、全体的に森や山しかないのに有名な観光スポットとして知られるH町が俺の住むところだった。

電車通学で学校に通うにも、行きだけで一時間半もかかるといって田舎から学校に通わなくてはならない。

だから毎日続けるのも俺の意識を損なうために、通うことを途中で放棄することも多々あり、出席日数などづくに過ぎ、留年決定を高校一年そうそうから果たしたのだ。つるむ友人など一人もいず、教師の目は完全に俺を敵視、二学期中間からなど一回も学校に出などしなかった。そのため、学校教師に呼び出されることが多々である……。

——学校にも不利益なんだ、君みたいな子は！

(黙れ……)

——親は離婚し、出来そこないの親ともなれば子の方も同じくらい出来そこないか……

(黙れッ！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ……)

なんで、俺だけがこんなことにならなきゃいけないんだよ……ッ！

——やり直したい、原因がある、その根本的な部分から……。

◆ あの後乱闘を起こした俺は、学校をあえなく退学を果たすことになった……。

外は馬鹿みたいにカツプルやら、お祭り、そんなことで賑わっていた。

生活費に困り始めていたために、外には出なくてはいけなかった。

バイトを探しても、自分の成績やら目つき、言葉遣いなど意味わからないことばかりを並びたてられ落ちる。その繰り返し……。

やっと見つけたバイトも、よくて二日、最悪一時間でクビにさせられる。なにをやっても長続きをしない……。

（世の中全部クソだツ）……ずっと思っていた思いだった。

“街中で流れる報道ニュース”はいつもうるさくて、俺に時間浪費させることしかない……。

—— だけど、今日はふと目が留まるニュースがやっていた。

—— 全身バラバラ殺人……被害者はとある男子高校生。身元が判別できなくなるほどにひどいありさまで見つかり、制服がA高校の男子制服だったために性別が判明。

右腕が今だこの事件で見つかっていない……どっちにしる、俺には関係のない話だな。



クリスマスの時も同じことをしていた。でも、結果は同じ……—

町までバイトを探しに出ても、仕事を見つけたことはかなわなかった。

疲れ果て、公園のベンチにもたれ掛け、グチッていたことをよく覚えている。

そんな時、ふと思った……

——一から、すべてをやり直したい……。

叶わぬ願いだとしても、誰かが叶えてくれるわけでもないのに願っていた。

もう、自分がよくわからない。なんでここにいるのか……、なんで生きているのか……。

そんなどうでもいいことが頭をよぎった瞬間——……自分の目を、目の前のある一点にとどめられたのだ。

色素ない髪、雪のように肌が白い少女……。その少女はどこまでも美しく、どこまでも——白かった。

「美しい」そんな一言でとどめられる言葉なんかじゃない。それを超えるほどの美しさを持つ少女が現れた。白いワンピースのような物を着て、髪を二つに結んでいる。そして、決定的なまでその存在をしらしめるであろう少女の金色の目が印象的だった。

その少女に言葉を失った俺に、少女の視線がこちらに向けられた。

「あああ……う？」

向けられた視線に俺は少女に威嚇する。——さっさとどっかに行ってくれと言わんばかりに……。

少女の口が開いた。

「……貴方はもう死んでいるのに、なぜそれ以上願う必要があるの？」

「……はあ？」

「死人、今のあなたはそれ……。『世界に取り残された』のよ、あなたは——」

「……意味……わかんねえよ……。勝手に、人を死んだことにしてんじやねえ！」

「否ね、あなたは『確実』に死んだ。死神の、この私が言うわ」

「意味わかんねえこといつてんじや——」

しかし、俺はそのとき、確かに聞いた。

自分は、こんなおかしな世界で一人で生きて行くものなのだとずっと思っていた。つまんなくとも、この現実が永遠に続くと思っていた。

……でも——

いつもうるさく、気を落ち着かせることもできない街中に流れる大音量のニュース速報から突然判明したバラバラ殺人の被害者の名前が——柩裡音と報道され、自分の名前だと気づくまでは……。

そこで自分の「本当」の現実が終わることを、突然とまでに知らされ、自分の中にある何かが「ここで終わりだよ」と告げるかのように――

目の前の、現実を強制的にのみ込まされている様な感覚だった……

## 人生終了ジャストタイム②

自分にとつての「人生」というのは、一体なんだったのか？

今となつては、とうといものなのかもしれない——

信じられないが、これが「現実」なんだと……改めて思い知った瞬間だった。

「……ひいらぎ、り……おん……。俺の、名前が……なんで……」

いや、それよりも、なんでこの尻アママに、俺の死を言われなくちやあならねえんだよ。

「つ……。第一、今報道された人物が俺とは限らせねえ。俺は生きてる。ここにいます。何で死んことにならなきやなんねえんだよ」

占い師とか、そんな類のこと口に出した瞬間こいつをここでぶちのめす。第一、俺はそういうのを信じちやいない。

「信じられなくても、事実は事実として『認識』すべき。これはあなたが知らなきやいけない死命しめいであり、『使命』なのだから」

「ふっざけんなっ！ じゃあ今ここにいる俺は何だ!? 俺が見ているこれはなんだ!?

それらすべてが『嘘』であり、本当の俺は死んだとも言えるのか？ それこそ、ありえねえだろ！」

「……嘘じゃない」

「……っこの、クソ尼が……」

「じゃあ、一体なんだって言うんだよっ！ テメエは一体、なんなんだよ！」  
色素のない、白色……いや、どちらかというところ、銀色に近い髪をなびかせる少女はこう言った。

「——死神ほかの言語で表すと、グリムリッパー、デスなどと呼ばれている」

「……はああ？ なんじゃそりゃ？」

「これを見ても、まだそんなことが言える？」

少女はどこから取り出したかわからない物を、それを俺に見せたのだ。

「——っ!？」

しかし、それを見た俺は驚愕した。

少女が俺に見せた物、それは——かつては本当に人間にあつたものなのかと疑うほどに、黄色化した人の人骨だったのだ。しかし……、自分が驚いたのはそれだけじゃない。

「……なんだよそれ、なにかのギャグ用にでも使う道具か……な、なにかか？」

ギラリと光る刃——円をつくるかのように大きく曲がる刃は、どう考えても 鎌 かま のものなのだった。

「証拠」

「ああ?」

「あなたが言った『証拠』そのもの提示した。ただ、それだけ」

「……………やっぱ……………おか、しい……………だろ……………」

こんな、街中に近い場所なのに、なんの躊躇も見せずに出すとか……………もう、殺人者の領域を超えてる。いや、それくらいなら、手馴れた殺人者でもできるだろう。

問題は、手に持っている人骨……………しやれこうべのほうだ。

黄色されているだけなら、かなり昔に死んだの人骨を掘り当てただけかと思えるだろう。しかし、そのしやれこうべは、ケタケタと、まるで生きているかのようにカタカタと顎の骨を動かし笑っているのだ。

「人間超えてんぜ……………」

信じられない——言葉にすれば何とか簡単なものか、しかし、自分にかかる疑問は、もう言葉に表せないほどに重くのしかかっているのだ。

「信じた?」

彼女がそう言う。

——やっぱ、まだ信じられるわけがない。しかし……………トリックだけの話は、とつくに終わっている。それを提示するのが「鎌」そのもの……………。だから……………、信じなきやいけない……………事実だつて……………言うの、かよ……………

「どんな意見でも、死神の……ワタシ達は、あなたの意見を尊重する。でも、事実を変えられることはいくらあなたが意見を述べたとしても、もう二度と変えられることのできない道を、あなたは通つてしまつてゐるの」

「だから、強制的に事実をわかつて……いふのかよ……。それこそ、めちゃくちゃふざけてるだろ……。でも……」

認めなきゃいけない。そう、彼女が——死神であるあざり、自分の人生が終わつたことを知らしめるには十分すぎるのだ。

だから、俺は思つたのだ。

（自分の人生つて、こんなものだったのか……。こんな、わけのわからないところで終わったのか……）

——終われるわけねえだろツ！

自分の中にある何かが発発し、何かかはじた。

俺は少女に詰め寄る。

「どこでだ、どこで俺は死んだ!? 俺はどうしたらいい!?!」

それは、もう自分の願考がんこうに過ぎなかつた。

少女が持つていた鎌、しゃれこうべはいつの間にかどこかに消えていた。

しかし、少女の手は、死というものを震える自分の手をやさしく包んだ。

「……しにがみ、は……人の魂をとるって聞いたことがある……。お前は、俺の魂をとり  
に着たのか？」

「……ワタシは、あなた強く願った最後の願いに従い、あなたの魂を救いきただけ。死神  
を悪者扱いしている時点で、あなたの知っていること、全部、違う」



## 人生終了ジャストタイム③

死神が、俺の知っている知識とは違う？

「それって、どういうことだ……？」

彼女の金の目が自分を捕らえ、そして口が開かれる。

「死神の本質は、魂を黄泉よみの国に案内することが、本来の使命。でも、それは、あなたが死んでしまってからの話」

「変わってねえじゃんかよ！」

怒声を上げる俺の声にひるみもせず、少女は再び口を開く。

「ワタシが、言っているのは、あなたが、死んでからのこと。あなたは、“人生”で死んでしまった。しかし、こつちでは、まだ、死んでいない」

——人生……？ こつち……？

「意味わかんねえよ、つまりどういうことなんだ？」

俺がそういうと、少女は少し難しそうな顔になるが、すぐに顔は平常に戻る。

「……こつち、つまり、ワタシがさっき言った『死人』としての第二の、死んだ後の人生のようなもので死んだらという話」

——……死人、死んだ後の人生……？ ……つまり、てつことは！ 今の俺って——

「〃幽霊〃……って、ことかよ……」

「そう。でも、正確には違う——」

正確には？

「——幽霊、物の本質は不の概念によつて、その概念のエネルギー体の塊としてできたのが幽霊。憤怒、強欲、憎しみ……時にとつてしてみれば、悲しみも、その不のエネルギー体となつている」

「てつことは、そんな、不を抱えて死んでしまったときの強烈な塊が幽霊つてことかよ」

コクツ、少女は頷く。

「じゃあ、それはまるつきり俺のことじゃ——」

「違う」

すべてを言い終わる前に、少女が否定した。

「なにがチゲエんだよ……」

一瞬の口ごもり、しかし、その後少女は確かに言った——

「あなたは、不の概念よりも、あなたは、あなた自身のことをちゃんとわかっていた……！ 限られたボールの溝に入る水は限られてる。あなたは、あなた自身の耐えられるものの本質を理解してた……！ だから、あなたは、あなたの親に言った……そうでしょ

……

「——ッ!？」

最後の方からは、少女の声は消えかかりそうなほど小さくなっていた。でも、必死に伝えるその言葉の意味と重みを俺に伝え……、そして俺はわかってしまった。

今にも、どこかに消えてしまうのではないかと見ているだけで心配になり、か細く、貧弱なこの少女言葉が、深く俺に突いたのだ。

「違う!… 違う違う違う違う違う!… 俺は、俺はあ……!」

しかし、それを認めてしまったら……、少女の言葉理解してしまったら……。

「俺は逃げた……!… わかってたからじゃない!! それは俺が、おれ自身が、俺の親を否定したくて、軽蔑したから、その場にいたくなかった、ただ、それだけだ……!」

夜空に響く罵声。

とめどない、自分のやりきれない気持ちがあふれんばかり内側から……自分の身体に——  
そして、ワナワナと高ぶる気持ちに追い討ちをかけるかのように少女は言う。

「——あなたは、自分の両親を助けたくてそうした。そうでなくとも、あなたは、自分の親以上にあなたは悩み続けた。その結果、病むという、自分の心を暗闇に静めるような形なってしまった!」

「……そんな、馬鹿な話になって……たまるかよ……。俺が、親を……？」  
「そう」

……自分の心はすでに認めていた。しかし、それを認めようとする意思が俺には足りないのだ。

「そばで見ていたワタシだから、ワタシはあなた助けたいって、だから思えた」

「……はあ？ それって……？」

変わらないの白い肌が、一瞬だけピンク色になった気がした。俺の気のせいかもしれない……

「もう、十分がんばった」

「——ッ……」

その言葉を聞き、俺はついに屈した——

小さい頃は毎日が豊かな家計であった終の家庭。

母親はどこことなく温厚で少し抜けていて、父親は頑固でこれと決めたらぜったいにその意思を曲げない。

それでも、俺の家庭は、確かに楽しかったのだ……——

いつ、その安らかな家庭が壊れてしまったのかはわからない。

そんな親を見ているのがたまらなくいやになり、それでも二人の仲を取り持ちたい

思ったのだ。

しかし、月日が進むことによって自分の心に「諦め」が芽生え、そして、ついには完全に諦めてしまったのだ。

でも、俺は確かにそのときに……—



「……ふつ、俺が不の概念がないねえ、半分はあつて、半分は違う、でも、結果として今を見たら、やっぱり失敗に終わってるんだ。やっぱり俺には不の概念があるよ……」

「……そう」

少女の地面——下を向く。

「でも、それに気づかせてくれて助かったのは、あつたな……。……しやらくせーけど、礼を言う。マジでサンキューな……」

パツと顔を上げる。

「……」

「でも、やっぱり、悔しいもんだな……」

今の人生は退屈で、それでいてつらいことしか待っていないくて、誰もいないさびしい人生。

「両親の、その両方に否定をして、人生にも否定し、ついには、自分自身もなくなってしまった……」

ふと、最近自分が思ったことを思い出す。

『やり直したい、原因のある、その根本的な部分から——』

「やり直したい。ねえ……」

自分の中にはやはり、そういつた、良心的な両親を思う気持ちがあつたんだろう。だから、そう思ったに違いない。

「それが、あなたの『願い』」

「ああ？ どういうことだ？」

「さつきワタシが言ったはず、『ワタシは、あなた強く願った最後の願いに従い、あなたの魂を救いきた』死神の本来の仕事は、死前に強く願った願いを叶えること。だから、ワタシはここに、いる」

「……………」

自分の心が瞬時にそれを理解する。

——確かに言っていた。そして、こうも言った『死神の悪者扱いしている時点で、あなたの知っていること、全部、違う』と……

全部がつながったのだ。

はじめにこの少女が来た理由も、俺に伝えた理由も、全部つながったのだ。

「お前、人に物事を伝えるのニガテだろ……。遠まわしすぎて理解ができねえんよおおおお！」

裡音の大声が公園の夜空いっばいに響き渡ったのだった……——

## 人生終了ジャストタイム④

「夜も大分暗くなつたな……。まあ、季節が冬だからなんだけだよ」

すっかりと話しこけて閉まつたために、夜は一面黒一色の闇に変わつていた。ケータイを取りだそうとしたが、手元になく、後から家の充電器にさしたままだということに気づき、仕方なく公園の電灯の近くにある時計から確認する。

「6時半か……」

——このままここにいても、話しはなかなか進まねえよな……。

「お前、家とかは？」

何気ない、考えなしの言葉だった——

フルフル。少女は頭かぶりを振る

少女は目を細め、言葉を出そうとする口からいいにくそう言う。

「ワタシに、家、ない。現地球に、拠点を置くほどの用意は死神界でされない」

「——!? そう、なのか、よ……」

よく考えてみればわかることだ。こいつに家なんてあるのか……？

「いく当て——……って考えてみりやお前に知り合いがいるわけねえのか……」



考えなしの自分の発言にイラだつ。

じゃあこいつはどうなる？ 俺が見捨てるのか？ それもある意味ひとつの選択肢の一つなのかもしれない。だけど、現実で……今それをやったら、俺は本当に「最低な野郎」になる。バカな、町にいるごろつきと同じ、クソツタレで、ヘドが出るくらい悪徳非道のあいっつらみたいに……。

「そんな、タマにはなりたくねえわな……」

「……？」

少女が首をかしげる。

「なんでもねえよ。それより、えくと……」

そういえば、俺こいつの名前をしらねえな。今までが今までの衝撃的な話だった分肝心な部分が抜けてるじゃねえか。

「——リーゼ……」

「……あ？」

「ワタシの名前。名前を探しているようだったから言った。ただそれだけ」

「あ、ああ。リーゼな……。俺は——」

「柊裡音……。それでいいんでしょ？」

「ちよいまで。何で俺の名前を知ってたんだよ……」

リーゼはたいして面白くなさそうに「知っているから」とだけ言う。すぐに自分から視線が外れた。

知っているからだけで理屈が通ると思ってるのか……こいつは……？

「まあいいや……。とりあえず、俺の家に案内する。だから、この際言つとく。男女とカ性別関係を抜きにして、お前にいく当てがないなら、このまま案内する俺のうちに好きないように使ってくれてかまわない」

再び視線が自分を捕らえ、驚いたように少しだけ目が大きくなった。

「……ありがとう」

「——その代わりだ」

俺は彼女の前に手を置く。

「さっきの話を詳しく聞かせろ。死んだこと、これからのこと……そして、今自分に起きている現状をあらいざらいますべてな」

リーゼの目が鋭くなった——気がした。

「わかった。——というより、はじめから、そうするつもりだった。これは、あなた自身にかかわる事だから」

## Aパート

## 願光クリアオブリージュ

H町のG地区——そこに俺の家はある。

あたりはとつくに暗く、まさに夜と呼ぶにふさわしいくらいに暗闇の世界に変わっていった。

家の居間で、テーブルを向かい合いで座る。

他人から見ると見合いか何かなのかと思われそうな光景だが、実際問題は違う。

家に帰り、すぐに万能地デジ化テレビを使って、ばらばら殺人の情報聞いたが、リーゼの言ったとおり、被害者は俺〈終裡音〉だった。

ばらばら殺人として、大胆にも道端でその死体は発見されたいらしい。頭部、腹部、足部はすべてそろっているが、なぜ右手だけが見つからないという。寒気が走り、自分の体が見つからないの聞くと不気味になってくる。

死体から発見された学生手帳で身元を発見。

幸いにも、その学生手帳に書かれていたのは俺が住んでいたまえの家のために、現在俺が住んでいるこの場所はまだ発見されていない。

(でも、いずれここも離れたほうがいいか……何かと面倒なことになる前に……)

「死んだことについては……このニュース速報見て、わかった。死んだのは、今から大体二日ほど前つてとこか。自分が何で死んだのかは、このニュースの情報聞けば一発でわかる……」

「そう……」

「でも、わからないことが一つだけある。なんで犯人は俺を狙ったのかだ。俺は他人との接点はおろか、家族との接点もいまいちだった。そんな俺を狙う理由がその犯人にはあったのか？」

「……ないとまでは言い切れない。そこまでワタシに詳しい情報は知らされてないから。でも、それ以上知ってあなたにとって何になるの？」

「——何にもなんないだろうな」

「じゃあ、何で？」

「知らねえよ。でも、感覚として言うなら、自分のことだから……なのかもな。他人のことに関しちや、俺は知ったことじゃない。でも、自分が関係しているなら、それはもう自分の問題。だから知りたい。……ま、そんな感じだな」

「……真つ当な意見。普通の人ならそこは『なにがなんでも』というところなのに」

「俺もそんなつまらないことをいう人間だと思ったか？ それは、俺をなめてる感想と

して受け取っていいのか？」

「違う」

「じゃあなんだ」

「……わからない」

「なんだ、そりや……」

感覚のズレってやつなのか？ ま、興味ないから別にいいんだけどな。

「とりあえず、自分の最後はわかった。次に教えてもらいたいのは——」

「死人に、ついて」

「そうだな」

はつきりいって、それが一番よくわからない。幽霊やゾンビなら、なんとなくどんな風になっているのかが想像できる。でも、これは別だ。聞いたこともなければ、自分の状態がどうなっているのかさえいまいちだ。

『何も変わっていない』それが素直な感想。どこも異常になっっている部分が見られない。「見た目じゃ、どこも変わってねえよな……」

「実際そう」

リーゼがそういう。

「はっ？ じゃあ、どこが変わったんだよ。幽霊みたいに壁をすり抜けるとか、ゾンビみ

てえに打つても切つてもしなねえのか？」

「違う。見た目も外見的にもなにもかわってない。変わったのは、もつと根本的な部分」  
根本的……………」

「今のあなたには…………自分という存在、今生きる意味を知る力がある」

「今生きる意味？ それってどういうことだよ？」

「…………死人は人間と違って、寿命が存在しない。しかし、死人が死なないわけじゃない。自分の生きれる『時間』というものが存在するの」

「時間…………？ それって、今もこくこくと減っているのか？」

こくこく。リーゼが頷く。

「でも、あなたは死人として転生したばかり。少なくとも、後半年は生きられる」

それでも、短いんだな…………。

「でも、それと力とは何一つ関係がないじゃねえか」

「死人はあなた一人ではないの、何百…………何千人も死人は存在する。あなた一人が死人というわけじゃないの」

「…………!？」

「その中には、時間が残り少ない死人だっている。時間は死人同士でしか奪えない。だから戦うの。自分の運命をかけて」

「……マジ、かよ」

いまだきそんなリアル体感バトルをやってはやるのか？

「少なくとも、この町にはあなたを抜いて六人の死人がいる。少なくとも、その中の一人か二人と接触して、戦う可能性もある」

「そのための力つてわけなのか？ でも、それつてよ……」

——いくらなんでも、出来すぎているんじゃないか。まるで、  
そうなることを望んでいるかのように。

その言葉を俺はのみこんだ。なにか、嫌な予感がしたからだ。

「いや、なんでもねえ……」

「……そう？」

「力の話に戻ってくれ」

こくつ。リーゼが頷く。

「力は、あなたの願いを媒体に、構成されているの。願いの本質がその力の特性を生み出している」

「はあ？ 意味がわからない。つまり、どうということなんだよ？」

リーゼはしばし言葉を選ぶ。

「……つまり、願いによって、その死人が使う力は違う」

「あ、ああ！なるほどようやく理解できたぞ」

つまり、使う人によって能力は異なるってことか。

「じゃあ、俺の願いは——」

「あなたの願いは『根本的な部分に戻る』こと」

「その願いを糧にして出来た俺の力つてのは……いったい——」

「ここから、ワタシにもわからない」

「ワタシにもわからないって……死神もいい加減だなあ〜」

「実際に見てみるしかないと思う」

「……それも、そうか。……じゃあ、俺はなにをすればいいんだ？」

「力は個々によって違う。それはあなたが見つけるしかない。なにか手がかりになるものはないの？」

「……あのな、俺がそんなもんしるわけねえだろ！第一、自分がばらばら殺人巻き込まれていたこと事態しらな、かつ……た——」

リーゼが首をかしげる。

「……？ どうしたの？」

そういえば、俺の右手だけはこのばらばら殺人の中で見つかっていない。なのに、今の俺にはちゃんと右手が存在する……



「手がかり……発見した」

俺は自分の右手を正面へ持つてくる。

「そう……。じゃあ、頭の中で思い浮かべて。自分が思った願いを——」

俺は意識を右手に向けながら、頭の中で思う。

……すると。

「っ!?!」

なんの予兆も、タイミングもなしに自分の腕が白く燃える炎に包まれたのだった。